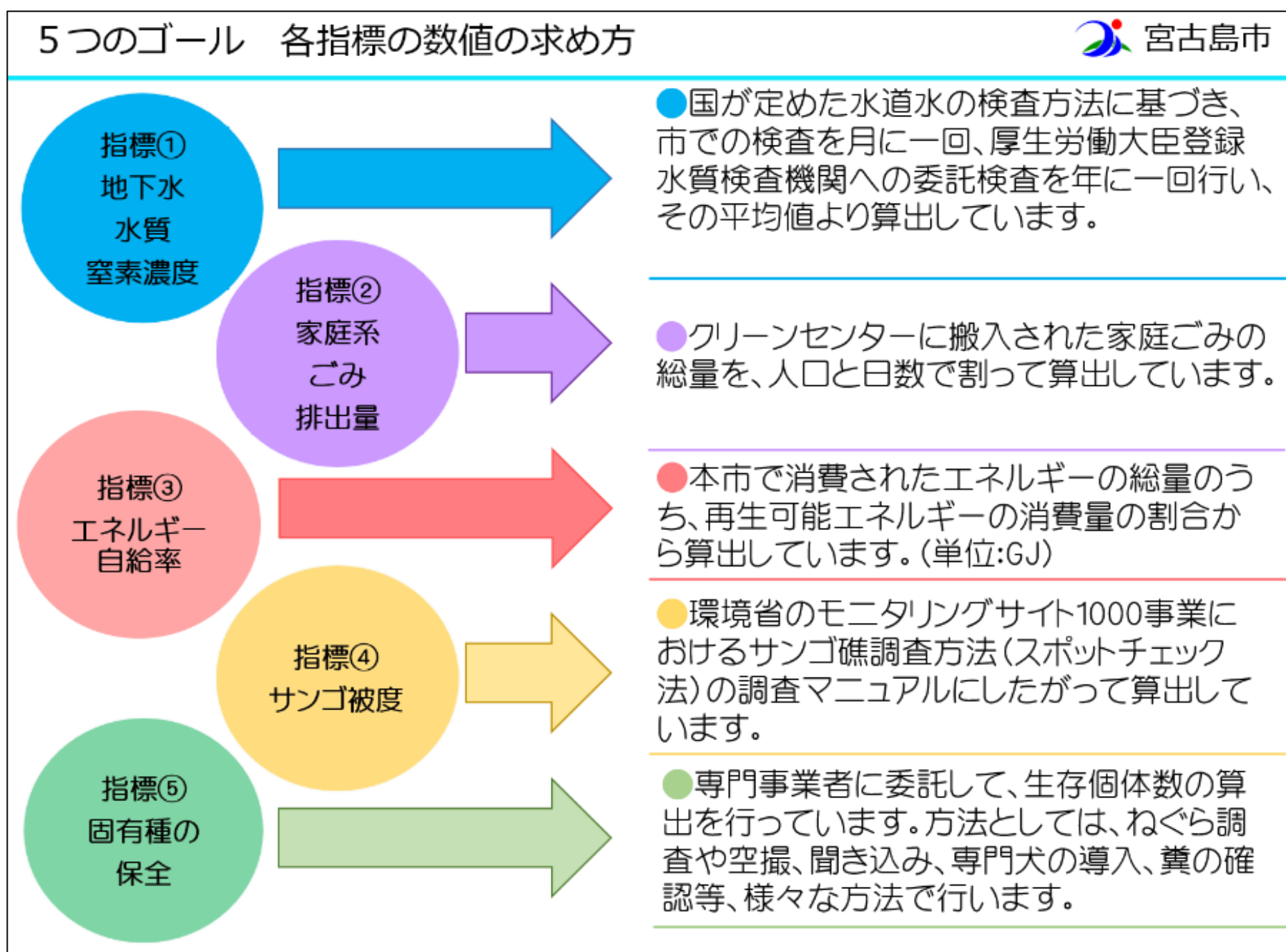
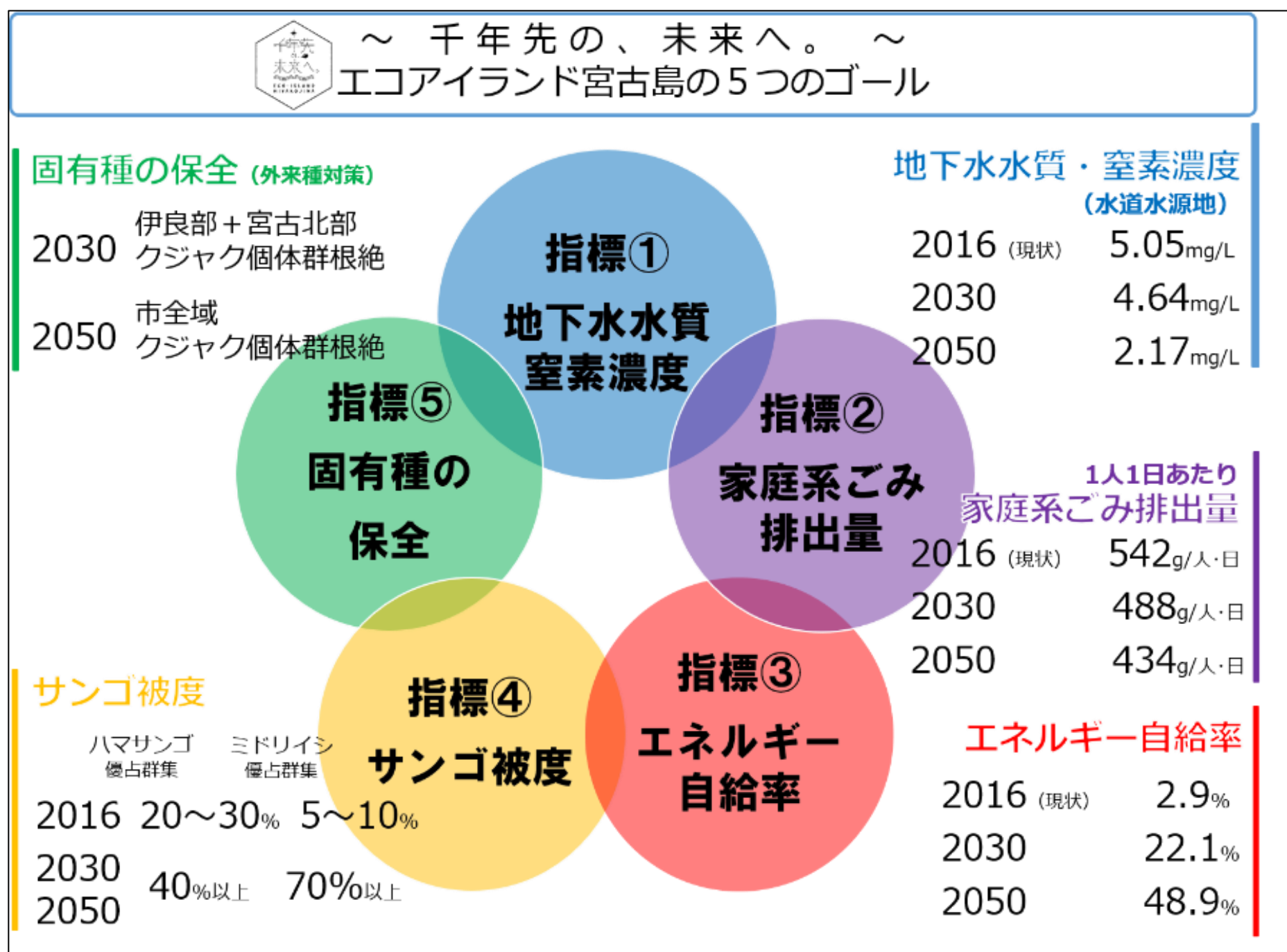


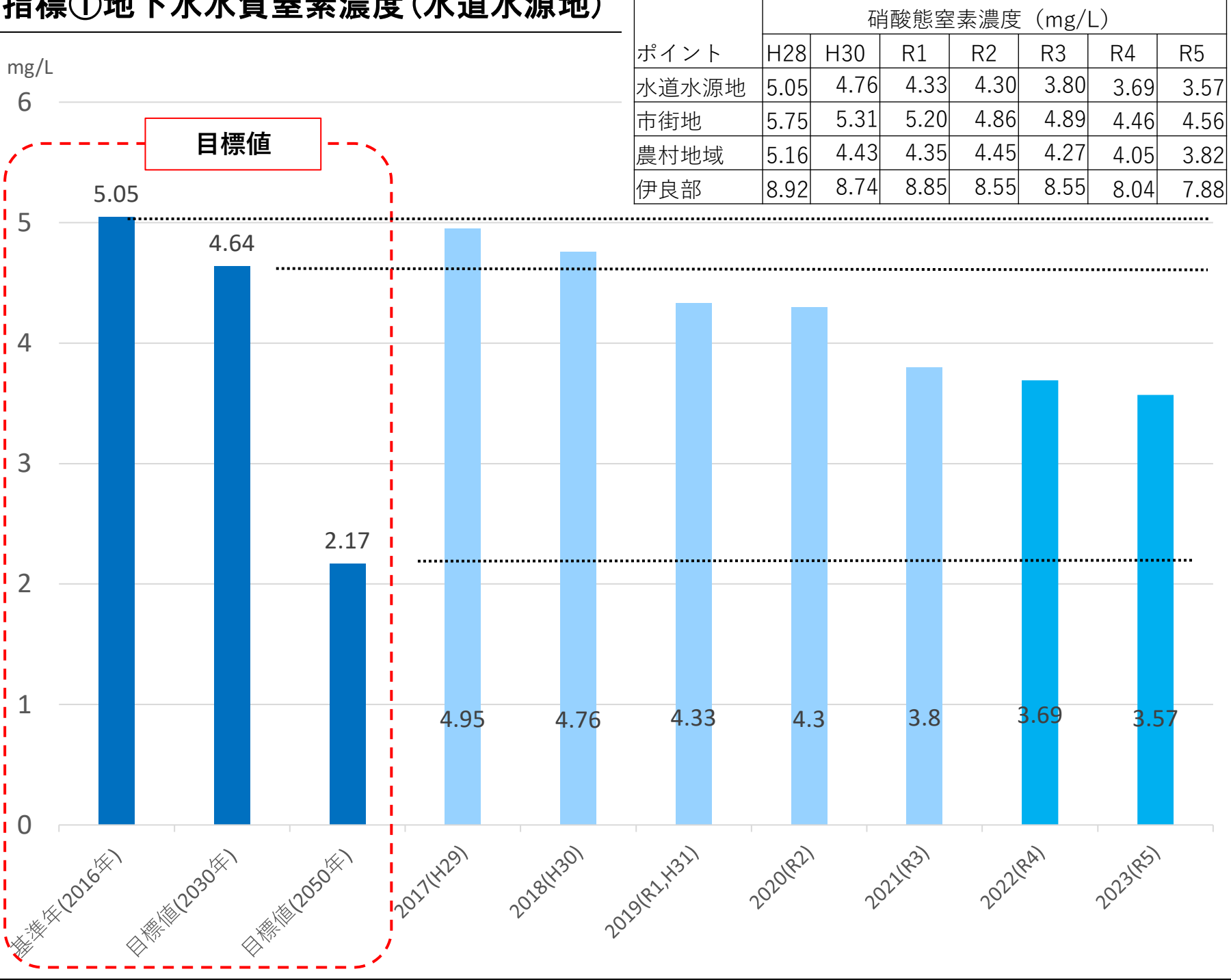
令和5年度エコアイランド宮古島推進計画 5つのゴールフォローアップ

エコアイランド宮古島の5つのゴール



令和5年度エコアイランド宮古島推進計画 5つのゴールフォローアップ

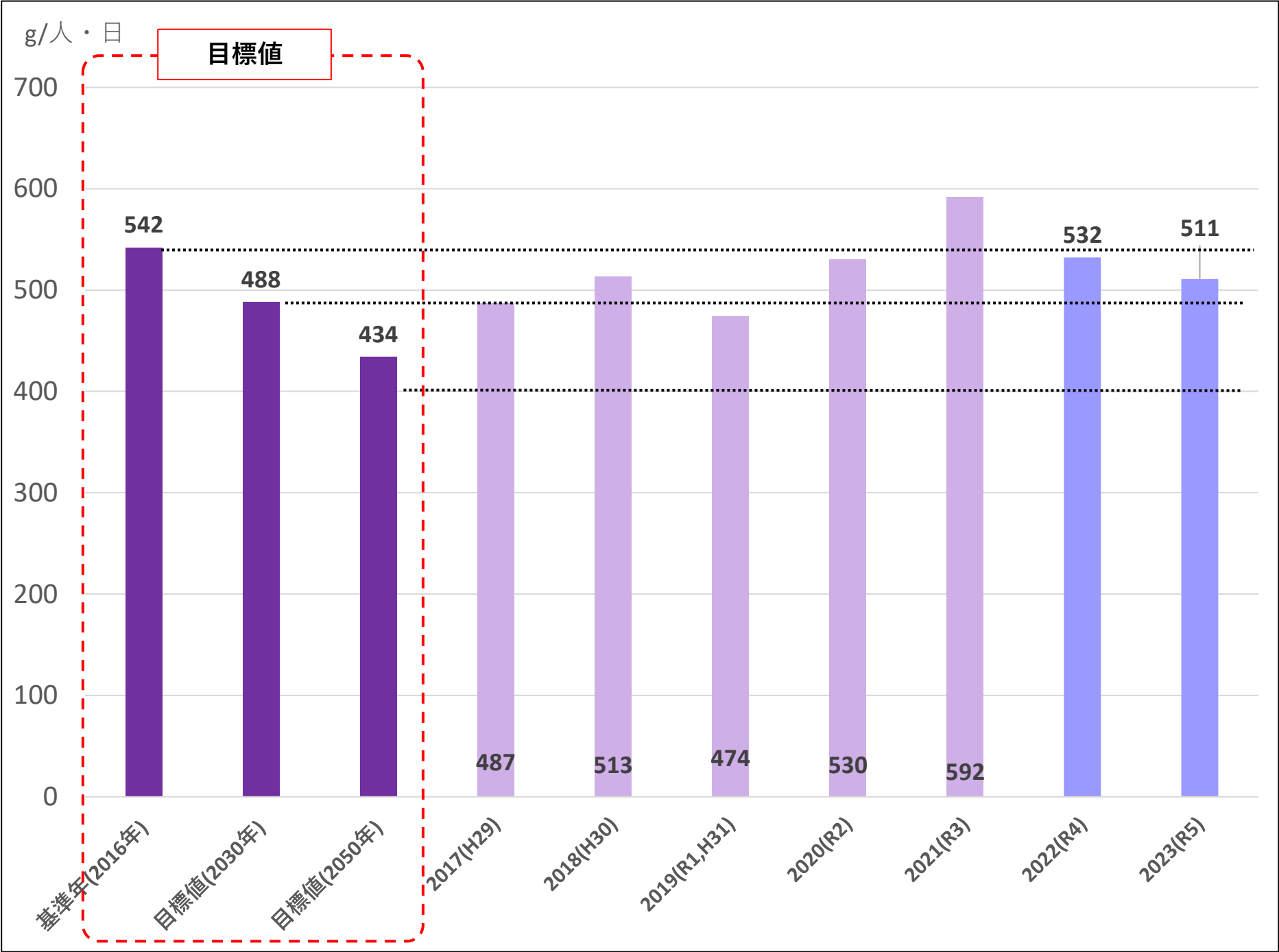
指標①地下水水質窒素濃度(水道水源地)



分析・評価				
令和5年度目標達成率	2030年	360.98%	2050年	51.39%
・水源地の保全のために、特定地域を水道水源保全地域として条例で指定したことが、大きな要因と考えられる。これにより、保全地域内で地下水汚染の可能性が考えられる新規建築物等を規制することができるようになったため、水源地への汚染が軽減されてきていると思われる。（水道総務課） ○水道水源地以外の数値について ・徐々に窒素濃度は低下している。要因として、施肥の適正化（時期、量、有機肥料・緩効性肥料の普及）の推進が大きく、農家の理解も進んでいるものと考察される。令和5年度の実績値においては、市街地での頭打ち傾向が見られる。（環境保全課・農政課） ・伊良部島は、不透水層が海面以下に分布しているため地下水は「淡水レンズ」の形で島の地下に存在している。宮古島本島とは異なり、地下水の流動が少ないこと。また、伊良部島での化学肥料等の施肥量が多いこと。この2つが要因となり、現在採水している地点では窒素濃度が高い状態となっていると考えられる。なお、伊良部島においても、徐々に硝酸態窒素濃度は低下している。濃度低下の理由としては、施肥の適正化（時期、量、有機肥料・緩効性肥料の普及）の推進が考えられる。（環境保全課）				

令和5年度エコアイランド宮古島推進計画 5つのゴールフォローアップ

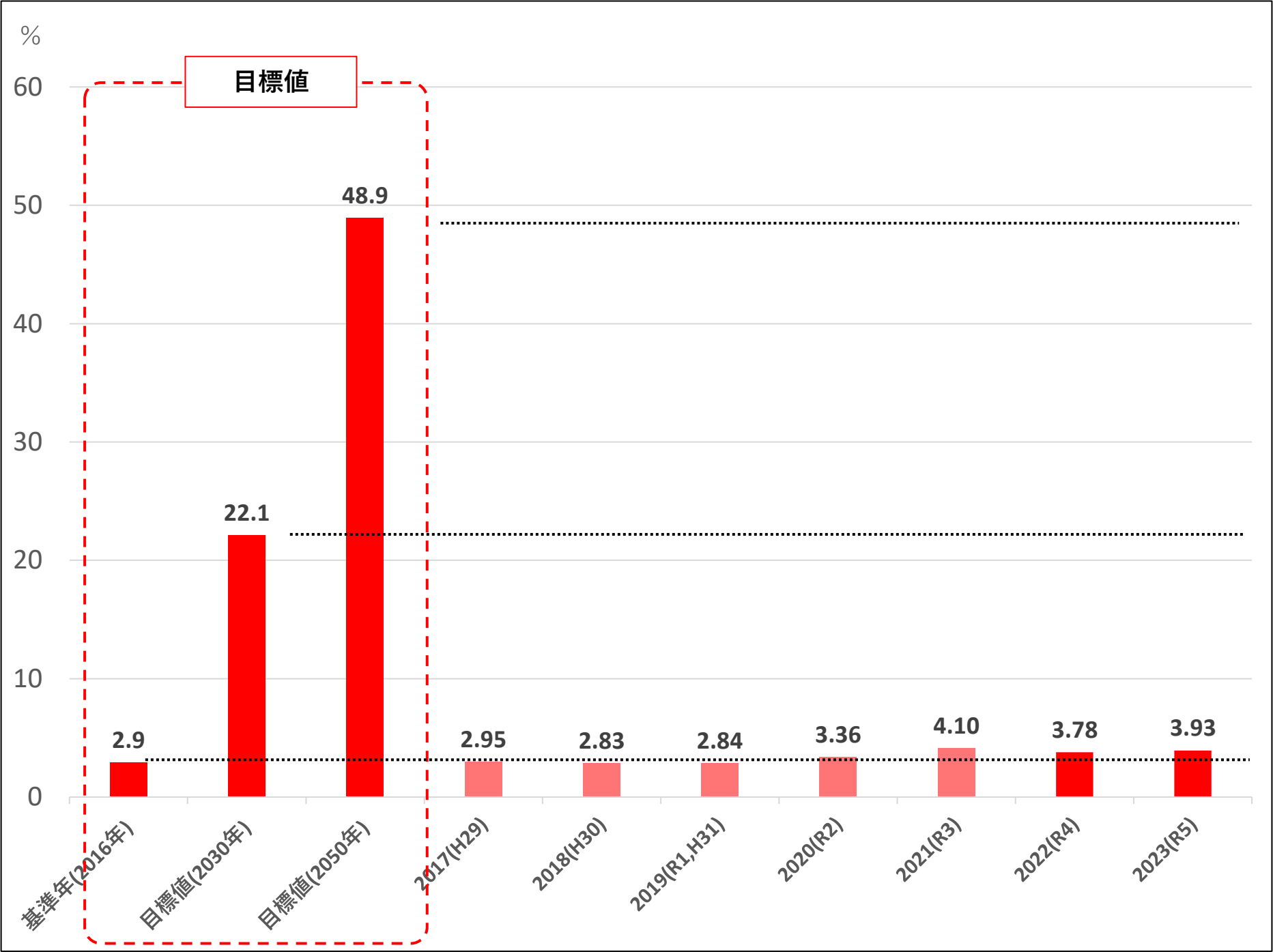
指標②家庭系ごみ排出量



分析・評価				
令和5年度目標達成率	2030年	57.41%	2050年	28.70%
・人口の減少が予測され、それに伴い排出量が減少すると予測されていたが、人口は減少せず、人口、世帯数ともに増加しており、排出量の減少に影響があると考えられる。（環境保全課） ・2023年の実績値が減らない理由としては、人口が増えてきていることに加え、コロナ禍後の経済活動が活発化していることにより短期間の出稼ぎ等住民票を移していない住民の増加が影響している可能性はある。更なるごみ減量化の取り組みへの意識の向上を図る必要がある。（衛生施設課）				

令和5年度エコアイランド宮古島推進計画 5つのゴールフォローアップ

指標③エネルギー自給率



分析・評価

令和5年度目標達成率	2030年	5.36%	2050年	2.24%
------------	-------	-------	-------	-------

・CO2排出量（エネルギー需要）はコロナ禍後、増加傾向となっている。ホテル建設など経済活動の活発化が原因と予想される。

・再エネ電力比率、エネルギー自給率ともに増加傾向を維持している。

・再生可能エネルギーは、太陽光発電を中心として、増加傾向である。

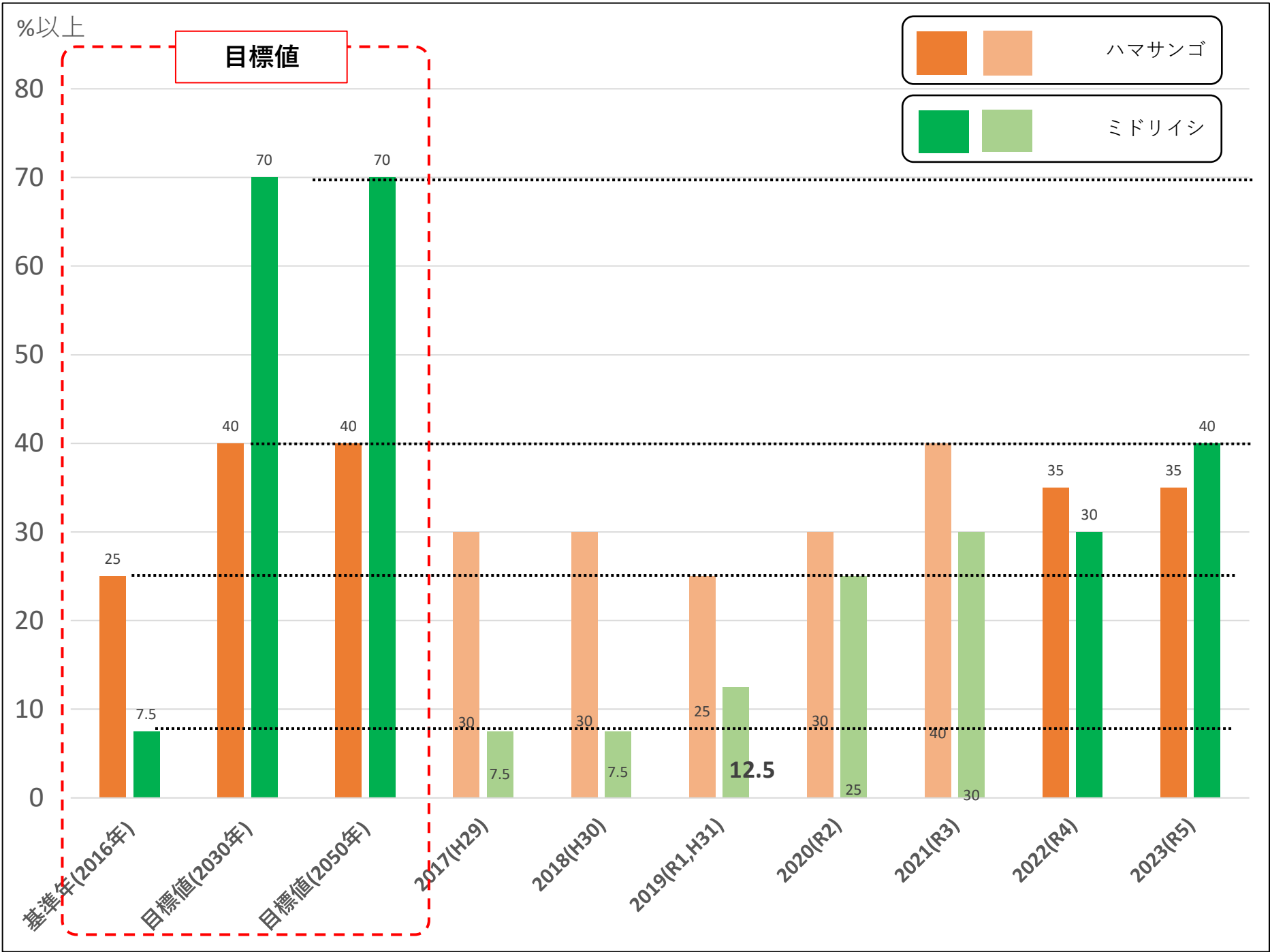
・自動車のEV転換の推進等、CO2排出量の削減に向けて更なる取り組みを検討する。（エコアイランド推進課）

	2016	2018	2019	2020	2021	2022	2023
CO2排出量（万t-CO2）	33.19	34.7	36.6	34.6	33.3	36.1	37.6
CO2削減率（%）							
再エネ電力比率（%）	12	13.9	15.55	16.25	17.25	18	18.14
エネルギー自給率(%)	2.88	2.83	2.84	3.36	4.10	3.78	3.93

	2016	2018	2019	2020	2021	2022	2023
再エネ(電力)(%)	-	-	-	-	-	-	-
再エネ(燃料)(%)	-	-	-	-	-	-	-
EV(台)	163	197	198	208	209	233	255
太陽光(MW)	22	22	25	27	30	33	35
風力(MW)	4.8	4.8	4.2	3.6	3.6	3.6	3.6

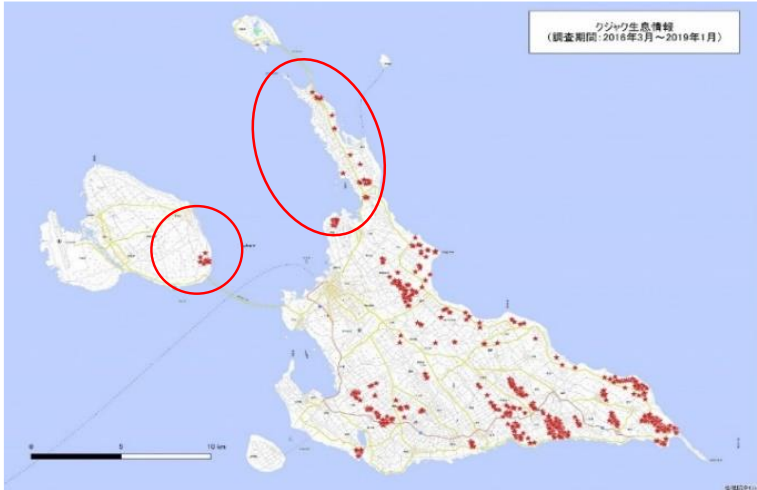
令和5年度エコアイランド宮古島推進計画 5つのゴールフォローアップ

指標④サンゴ被度



分析・評価				
令和5年度目標達成率ハマサンゴ	2030	67%	2050	66.67%
令和5年度目標達成率ミドリイシ	2030	52%	2050	52.00%
【ハマサンゴ優占群集の分析・評価】 ・カヤツファでは、ハマサンゴに特段の変化はなかったものの、台風により浅場の葉状コモンサンゴ群集が被害を受け、サンゴ被度が低下した。一方、吉野海岸においては枝状コモンサンゴが増加傾向にあり、サンゴ被度の上昇が確認された。 【ミドリイシ優占群集の分析・評価】 ・八重干瀬（カナマラ）では2019年度からサンゴ被度の上昇が続いており、2023年度においても5cmを超えたばかりの小さなミドリイシ類が多数確認された。 来間島沖においても10cmに満たない小さなミドリイシ類がよく目につき、今後もサンゴ被度の増加が期待される。（水産課）				

指標⑤固有種の保全

現状	
クジャク ・宮古島では、ねぐらとなる森林にそって広域に分布し、飽和状態であったが、5年連続で500羽以上捕獲している影響もあり、警戒心の強い個体の割合が増え捕獲が困難になりつつある。 ・朝・夕、近隣の畑や草地にエサを求めて現れる。雑食性で草の芽・葉・実、昆虫、爬虫類等を捕食し、繁殖力も強く天敵もほとんどいないため、この数年でよく見かけるようになった。警戒心が強く、遠くからでも人と分かるとすぐに森に入ってしまうため、捕獲には技術と経験が必要。 ・令和5年度の実績は、個体：1011羽捕獲、営巣卵：99個採取。猟師の技術向上と人数の増加により捕獲数が増加。	
・伊良部牧山地区においての生息数は、令和元年13.2羽、令和2年11.7羽、令和3年9.4羽、令和4年3.5羽、令和5年11.5羽程度と推定される。 ・イタチの捕獲数も増加傾向にある ・セマルハコガメ（国天然記念物）が捕獲・駆除できないため急増している。	< 2030年に根絶を目指すエリア > 

分析・評価	
令和5年度捕獲数	1011羽
・捕獲方法の多角化や先端技術（ICTやドローン）の導入、専門業者（クジャク探索犬による営巣卵採取、ねぐら調査）による捕獲、わな（箱わな、囲いわな）による捕獲と人材（団体）の育成、群（集団）ごと捕獲できる手法の開発がポイント。 ・市としてイタチの捕獲許可を取得（R1.8）、県事業に協力（フォロー）するかたちで、わなの設置等、捕獲手法の確立を目指していく。 ・セマルハコガメは国指定天然記念物であるため、捕獲・処分することができないが、それ以外の外来のカメ類については捕獲を継続する。 ・ノネコによる固有種・希少種の捕食は数多く確認されており、早急な対応が必要であるため、市の予算確保、県保健所や自然保護課と調整し対策を検討していく。猫の室内飼いを推奨する。（環境保全課）	